

龜井勝一郎全集

第十六卷

講談社

龜井勝一郎全集 第十六卷



昭和四十七年六月二十日 第一刷発行

定価 一五〇〇円

著者 龜井 勝一郎

発行者 野間 省一

発行所 東京都文京区音羽二一二二
株式会社 講談社

郵便番号 一一二
電話 東京〇三(錦)一一一(大代表)
振替 東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社
製本所 大製株式会社

落丁本・乱丁本は
お取り替えます。
© 龜井斐子 昭和四十七年

Printed in Japan

0395-135162-2253 (0)

(文1)

龜井勝一郎全集 第十六卷

編
纂

山 丹 中 河
本 羽 村 上
健 文 光 徹
吉 雄 夫 郎

第十六卷
目次

二十世紀日本人の可能性

序 説	三	大都会における知的英雄	六
現代の課題	三	人間教育の技術	八
精神の危機について	六	東洋への回帰	三
非寛容の美徳	六	東洋と日本人	三
革命家の倫理	七	無限定の叡智	六
熟練者	三	後 記	一六

現代史の中のひとり

様々な感想	二三	姦通小説論	二三
東京の表情	二三	独裁者について	二三
見事な過去	二〇	現代の五つの誘惑	二六

現代文学の五つの焦点	一四〇
大人の修身	一五〇
宗教意識について	一六二

批評に関する覚書	一七〇
精神医学	一七五

現代史の課題

序	一八五
現代歴史家への疑問	一八七
歴史への欲求と二つの史観	一八七
歴史家の資格	一九〇
現代史のむづかしさ	一九三
歴史教育について	一九五
附記	一九九
歴史家の主体性について	二〇〇
交流のための提案	二〇〇
歴史を書く人と読む人	二〇四
歴史における客観性とは何か	二〇八

日本近代化の悲劇	二三二
三つの現代	二三三
対中国関係と日本の矛盾	二三四
近代化と危機の意識	二三三
擬似宗教国家	三三九
開国の中の鎖国	三三九
「かのやうに」	三三三
新しい型の天皇悲劇	三三三
無政府状態の独裁	三三六
天皇と国民のつながり	三三八
古典の歪曲と死の教育	三四四

文学・人生・社会

革命の動きをめぐるつて……………	二四
祖国の中の異国……………	二五
戦術について……………	二五〇
革命と知識人……………	二五七
現代知識人の二つの特徴……………	二六二

戦後日本についての覚書……………	二六六
敗戦の特徴……………	二六六
新しい歴史の創造と破壊の条件……………	二七二
後記……………	二八二

社会について……………	二八七
現代人と宗教……………	二八七
心の内部の問題……………	二八九
歴史への関心について……………	二九三
政治的無関心について……………	二九五
「赤い」といふ言葉について……………	二九六

民主主義について……………	三〇〇
伝統について……………	三〇二
天皇と皇族について……………	三〇四
知識人の交代……………	三二三
もし私が編集長だったら……………	三五五

私の人生観

日本人の思考	三二
どういふ特徴があるか	三三
精神の健康診断の必要	三七
正しい言語表現のために	三三

知識階級について	三八
不安定と変化	三八
西洋崇拜とアジアの軽視	三三
自己評価のむづかしさ	三七

歴史の星々

民族と文学	三五
はじめに	三五
一 背景についての考察	三五
二 流離の美	三六
三 陰翳の美	三四

四 変貌の美	三九
民族変貌期における伝統の意味	三九
一 危機意識のあらはれとして	三九
二 伝統形成における特徴について	三六
三 戦争と死の伝統について	三六

四 空白と滅びの自覚について……………三九二

日本人の美と信仰

日本人の美意識……………	一〇一
日本人の自己評価……………	一〇二
自然に対する愛情をもつた美術的国民……………	一〇三
知的な分裂主義と事大主義……………	一〇四
流離の美……………	一〇六
「死」といふ言葉と涙……………	一〇七
陰影の美……………	一〇八
あいまい性……………	一〇九
罪惡觀の稀薄さと無常美觀……………	一一〇
美しい言葉……………	一一一
日本人の美意識……………	一一三
けふの問題……………	一一四
子供の犯罪……………	一二四
日の丸と君が代……………	一二七
スポーツの明暗……………	一二九
街角の不安……………	一三三
皇室と国民……………	一三四
にせ札とつまみ食ひ……………	一三七
小さな親切運動……………	一四〇
週刊雑誌のモラル……………	一三一
現代の英雄……………	一三四
青少年と読書……………	一三六
文化の日を迎へて……………	一三八
相づく自殺のまきぞへ事件……………	一四一

拾遺

政治家と芸術家……………	四七	東洋の星……………	五六
民族性をめぐる様々の感想……………	四八	知的混乱……………	五二
現代精神に関する覚書……………	四九	歴史が日本人に負はせた三つの課題……………	五三
混血について……………	四九	対立する底にあるもの……………	五〇
日本人の「態度」について……………	五〇	現代日本の発見……………	五二
新しい人間像……………	五一	「日本人」の実験の日に……………	五七
日本人とは何だらう？……………	五一	日本人は変つたらうか……………	五三
泥くささといふこと……………	五二	典型的人間……………	五五
非政治的発言……………	五九	日本近代化のアジアにおける意義……………	五九

解題……………	五〇
---------	----

二十世紀日本人の可能性

序 説

現代の課題

「二十世紀日本人の可能性」といふ題目のもとに私の語らうとするのは、現代の混乱に抵抗するにはいかなる精神能力を必要とするか、云はば抵抗像を形成するための諸条件の考察である。私の出発点は眼前の混乱そのものである。こゝに立脚しつつ、過去あるひは現在から任意の人物を選び、規範となるべきその精神能力について検討を加へたい。しかし過去の人物の偉大さを賞揚し、現代人を非難するだけでは問題にならぬ。暗黒面を分析し、たゞ感傷におちいつてゐるだけでもむろんいけない。何びとも経験しなかつた新しい場において見出される新しい可能性を予見したいものだ。結果とし

て、現代が求める理想の人間像、精神の理想型と云つたもの、少くともその可能性が少しでも描き出されたら幸ひである。これは私といふ個人の能力を越えた問題かもしれない。何故なら、現代のあらゆる問題、そのすべてについての、それも全面考察を必要とするからである。

敗戦直後から今日まで、私の抱いてきた主要なテーマは、明治、大正、昭和の三代に形成された「近代日本人」とは何かといふことであつた。その実態とその運命についての考察であつた。すでにいくつかの論文や感想でくりかへしてきたところだが、むろん完了したわけではない。手に負へない紛糾した事態や、既成觀念では割りきれない新しい課題が次々と生じてくる。「二十世紀日本人の可能性」を展開するに當つて、何が問題であつたかをまづ要約しておきたい。

私は二つの面から近づいてみた。一つは明治から今日まで、歴史が我々に課した未解決の、云はば相続された問題を整理してみることであつた。いまひとつは、刻々に変化する眼前の混乱の諸相を出来るだけ正確に見究めること、この二つである。淵源を辿つてゆくと、当然、十九世紀日本の考察も試みなければならない。鎖国も問題になるが、直接我々に関係ふかい「近代ヨーロッパ文明」との接触を中心として考へてきた。云はば東西両文明の接触地点としての日本、こゝに生じた民族変貌の独自性を明らかにしたかったのである。

ところでこんなことを考へてゐる間、いつも私の念頭から離れなかつた二つの言葉がある。二つ並べてみると甚だ印象が深いので次に引用しておきたい。

「我々ヨーロッパ人がギリシヤに負ふものこそは、おそらく我々を最も深く他の人類から區別したものである。我々は『精神』の規律、あらゆる秩序における完成の異常な模範をギリシヤに負うてゐる。あらゆる事物を人間に、完全人に結びつけようとする思考方法をギリシヤに負うてゐる。……この規律から科学が生れることになった。我々の科学は、即ち我々の精神の最も独特な産物、最も確実な最も個人的な光榮である。ヨーロッパは何よりもまづ科学の創造者だ。諸芸術はあらゆる国に在つたが、眞の諸科学はヨーロッパにしかなくつたのである。」(ポール・ヴァレリイ「ヨーロッパ人」より)

「アジアは一つだ。ヒマラヤ山脈は、二つの強力な文明、孔子の共同主義をもつシナ文明と、ゾーダの個別主義をもつ印度文明とを、たゞこれを強調せんがために分つ。しかしこの雪の障壁を以てしても、あの窮極と普遍とに対する広い愛の拡がりを、たゞの一時も遮ることは出来ないのだ。この愛こそは全アジア民族共通の相続財産ともいふべき思想である。この愛こそは、彼らに世界のすべての大宗教を生み出すことを得させたものののだ。」(岡倉天心「東洋の理想」より)

若干の時代を隔ててではあるが、東西の二人の詩人が、

各々その属する国土から發したこれらの言葉ほど興味ふかいものはない。この言葉の背景となつてゐるのは、云ふまでもなく地中海とヒマラヤ山脈である。それは互に憧憬の対象であるとともに、和解については懷疑あるひは絶望の対象でもあつた。事実として東洋は長いあひだ「科学」の前に敗北感を味はつてきた。或は深い矛盾を感じてきたが、二つの思想がどのやうに交叉しそれぞれにその価値を決定づけられるかといふ問題は、なほ長年月を経ないとわからないかもしれない。「東」と「西」を安易に圖式化して対立させてはならない。容易ならぬ課題である。たゞ東西兩文明の接地点にある日本人は、これを思索の対象として担はねばならぬといふことは明らかだと思ふ。私はこの運命を喜ぶものである。

同時にかういふことも考へざるをえない。ヴァレリイと天心の言葉は、或る意味では「過去の光榮」に関するポエジーではないか、白鳥の歌ではないかといふことである。アメリカとソヴェートが出現したからである。新しい中国も誕生した。互に異質的な存在だが、二十世紀の二つの「新世界」としてその圧力は全世界を蔽ふに至つた。ヨーロッパの科学もアジアの愛も、その他の一切は大きな変化を迫られつゝある。原子力の発明はこれに拍車をかけた。今までの東洋と西洋といふ問題も、角度を変へなければならぬ。アメリカ精神とソヴェート精神との対決の背後にそれは押しやられる